

東京都公文書館所蔵資料パネル展

大震災の記憶と記録

会期 平成24年7月30日～10月25日

東京都公文書館では、所蔵資料パネル展「大震災の記憶と記録」を開催します。

昨年3月11日に発生した東日本大震災の後、死者・行方不明者21,959人を数えた明治29年（1896）の三陸沖地震の記憶と記録が注目されました。自然災害がもたらす被害を最小限に抑え、また次につながる復興の方策を模索する上で、過去の歴史に学ぶことが重要であることにあらためて気づかされたのです。

今回のパネル展では過去に東京地域を襲い甚大な被害をもたらした安政2年（1855）の大地震と、大正12年（1923）の関東大震災を取り上げ、その被災状況、救護・救援の動きなどを跡づけていきます。このパネル展が、あらためて災害・防災をわが事として省みるきっかけとなると同時に、過去の記憶を未来に活かしていくための記録資料の重要性を想起していただく機会となれば幸いです。

なお、今回の展示パネルは平成23年8月16日から9月7日まで、公益財団法人特別区協議会との共催で行った同タイトルのパネル展（於・東京区政会館）に出展したものです。

平成24年7月

東京都公文書館

幕末の災害ルポルタージュ

『安政見聞誌』・『安政見聞録』

安政の大地震発生の直後から多数のかわら版が発行・販売され、人々の情報への欲求を満たしていました。そうした地震を当て込んだかわら版もようやく下火となった翌安政 3 年 (1856) 4 月、地震災害情報の集大成をねらう本格的ルポルタージュ出版、『安政見聞誌』が売り出されます。計 29 の挿絵を盛り込んだグラフィックな構成と、地震後に飛び交った興味深い噂話、トピックスの紹介により、初版 900 部はたちまち売り切れ、2000 部の増刷も「大評判」となっています。

この書物の作者として名が記されているのは一筆斎英寿ですが、考証研究により仮名垣魯文との共著であったことが明らかにされています。魯文といえば『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽鍋 (あぐらなべ)』で明治開化期の花形作家となりますが、戯作作家兼ジャーナリストとしてその力量を蓄積していく時期の作品の一つがこの『安政見聞誌』であったということになるでしょう。

さて、売れ行き好調だった本書ですが、5 月に入り事態は暗転します。17 日、町奉行所から召喚され、翌月 2 日には関係者一同に処罰が下されたのです。もちろん書物自体は発禁処分となりました。「無改物」、すなわち無届けの出版物がかくも好評を博している状況に対し、町奉行所も看過できなくなったということでしょう。こうして、版元は所払い、画師・芳綱、作者一筆庵英寿や板木師らは支払われた制作料を取り上げられた上で過料として五貫文を課されました。なお後の仮名垣魯文は作者として名を明示していなかったおかげで科を免れています。

その 6 月に刊行されたのが『安政見聞録』でした。明らかに『安政見聞誌』を意識して作成されたと考えられる本書の編者は服部保徳と記されていますが、この人物については不明です。

挿話は全部で 17 編に及んでいますが、著者自ら凡例で述べるように、自分の子孫をして忠孝義を励ますために近頃の見聞をあげたという、少々教訓くさい内容となっています。

このパネル展に出展した『安政見聞誌』『安政見聞録』の画像に係る挿話のあらましを、次頁に紹介していきましょう。

(参考) 北原糸子『地震の社会史—安政大地震と民衆』2000 年、講談社学術文庫

『安政見聞誌』より

■余震を恐れて仮屋に住居の凶及び余震の記録

大地震後には再び大きな揺れが襲うことを恐れ、本宅に帰らず仮小屋に止まる人が多かった。泣きぐずる子に「本宅へやって寝かせるぞ」と言えば泣き止むほどであったとか。左側はある人物が記した余震の記録。白は昼間、黒は夜間の揺れを表し、○（「毬」）の大小が震度を表している。

■四谷御門の櫓破損の凶

江戸城の見附は36ヶ所あるが、この度の地震で破損しなかったところはない。とくに四谷御門の櫓は屋根より石垣にかけて凶のような具合。物の堅固なことを城門に譬えるが、今回の地震ではこの有り様である。震動の強さを思い知らされる。

■死体を香花院（檀那寺）へ送る凶

この度の震災の死者が、10万8千人の死者を出した明暦の大火をしのぐという人がいる。江戸市中の寺院に5人ずつ葬ったとすれば20万人を超えるはずというから、明暦大火以上という推測もなるほどと思われる。実際、幾体とも知れぬ遺体が、筵に包まれ、四斗樽に入れられ、あるいは車に載せられて檀那寺へ向かうのを見た。実に嘆いても余りある光景であった。

『安政見聞録』より

■孝婦姑を救はんとして還って非命に終る

千住宿のさる商家の嫁は大地震に驚き夢中で庭まで逃げたが、姑の姿が見えないことに気づき、屋内で動けずにいた姑のもとへ駆け入った。ようやくにして背に負って逃れ出ようとしたところで傍らの柱が折れ、二階の梁がその上に落ち掛かり二人諸共に即死してしまった。

この婦人は至孝と称しても過当ではなかろう。このような志がありながら死を免れなかったことは、実に天命というものであろう。

■士人飢民を憐ミて街頭に握り飯を施す

ある薄禄の武士、大地震で家は傾いたものの崩壊は免れ、周辺を見て廻るとまことに哀れな様子の者がたくさんいる。妻に命じて飯を炊かせ握り飯をこしらえ施して歩いた。しかし釜が小さいから数には限りがある。ふと見ると井めしの行灯を灯す店がある。早速飯を買い受けさらに施しを続けようとするが、亭主は親族の方へ贈る分といいこれを断る。しかしやがて武士の志を深く感じ、合力したという。自身事足りた生活ではないのに、資材を捨てて飢民を救うとは実に善者というべきである。

震災予防調査会と「東京市火災動態地図」

震災予防調査会は明治25年(1892)に設置された文部省所管の地震研究機関です。その前年に発生した濃尾大地震の被害を受け、以後の地震被害を最小限にとどめることをめざして発足したもので、広く地球物理学・建築学等に及ぶ調査研究が実施されていました。

大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災のもたらした甚大な被害実態についても幹事・委員・嘱託の体制に臨時委員を加えて詳細な調査が実施され、そのまとめが大正14年3月、『震災予防調査会報告』第百号として刊行されました。

各分野ごとに地震篇(甲)、地変及津浪篇(乙)、建築物篇(丙)、建築物以外の工作物篇(丁)、火災篇(戊)に区分された報告書のうち、火災篇(戊)に添付されたのがここにパネル化した「東京市火災動態地図」です。

震災予防調査会委員として同報告書に「大地震ニヨル東京火災調査報告」をまとめた中村清二氏は、当時東京帝国大学理学部教授で、地球物理学・光学の権威でした。

震災後第1回目の調査会で火災実態調査の担当となった中村氏は、4千万平方メートルにも及んだ焼失区域の調査を念頭に、人出の確保と、調査地点への移動手段の確保に頭を悩ませました。しかし、人出については東京帝国大学理学部、物理、天文学科の学生36名がボランティアを志願し解決、また「某富豪」から数千円の寄付を得て調査用の自動車を借り入れたことで、調査員の現場派遣と回収の問題も解消したと述べられています。

現場での調査事項は、①発火地点の場所・時間・原因、②火流の進んだ経路・スピード、飛び火及び延長を助長した原因、③鎮火の要因等でした。しかし、焼け跡の片付けをしている人に中村教授が質問すると、「あなたは火災保険会社の人ですか」といかにも怪訝な顔をして反問され、なかなか具体的な話が聞けなかったとのこと。教授は、その点角帽金ボタンの学生が調査員だと、相手は「火災のご研究ですか」と尋ね、「さようです」と答えれば「赤裸々に話が進むのである」と述べ、現場調べで学生ボランティアが有効に機能したと証言しています。

こうした苦労の結果集まったデータをもとに、火災の同時刻線と火流線を克明に記入した「東京市火災動態地図(9分割図)」が完成し、大地震後の防火対策を策定する上での科学的根拠を提供していくことになったのです。

写真家・岡田紅陽と『東京府大震災写真帖』

東京都公文書館が所蔵している『東京府大震災写真帖』は、大正12年（1923）9月1日に発生した関東大震災の被災実態をフィルムに収めた白黒写真140点を台紙に貼り整理した、文字通りの写真帖です。写真帖には撮影の経緯に関するコメントは一切記されていませんが、これらの写真の多くが、大正14年3月に東京府が発行した記録集『東京府大正震災誌』に掲載されているところから、東京府の委嘱による撮影写真であったことが判明します。実はこのカメラマンこそ、後に富士山の写真の数々を芸術の域に高めていく写真家・岡田紅陽その人でした。

岡田紅陽（本名岡田賢治郎）は明治28年（1895）新潟県中魚沼郡中条村（現十日町市）生まれ。大正3年（1914）早稲田大学に進み、カメラ、そして富士山と出会い、懸賞募集で入賞を繰り返してその賞金で念願の自分のカメラを入手、いよいよ撮影に没頭し、大正5年頃には写真で富士山を征服することを決めたとされます。大学卒業後は神田の米穀取引所で働いたり、同族により設立された物産会社に勤務するものの、これが倒産したことを契機に写真で生計を立てていくことを決めます。そして写真家としての生活が落ち着き始めた頃に遭遇したのが関東大震災だったのです。

この時、東京府の委嘱で震災直後の惨状をフィルムに収めていきますが、海外の新聞にもこれらの写真が紹介され、凶らずも彼の写真が世界中の人々の目に触れることになりました。また、震災後の荒れ果てた街を失望感に苛まれながら撮影していた時、富士山の山肌が紅に輝き出した荘厳な姿に感動し「紅陽」という文字が浮かび、以後「紅陽」と名乗り始めたという話も伝えられています。いずれにしても写真家・岡田紅陽の人生にとって関東大震災が大きな画期となったことは間違いなさそうです。

ところで、岡田紅陽といわれてもあまり聞いたことがなかったという方も少なくないかもしれません。しかし、実は私たちはほぼ毎日のように岡田紅陽が撮った富士山を目にしているのです。それは千円札。野口英世の肖像の裏側に富士山と湖に映る逆さ富士が描かれています。これこそ岡田紅陽の作品「湖畔の春」に写された本栖湖畔からの光景をもとにデザインされたものなのです。ちなみに旧五千円札の富士山も同じ作品からのデザイン。造幣局のデザインのプロが二世代の紙幣に選んだ富士山。その構図の美しさ、完成度の高さをうかがうことができるでしょう。

（参考）一瀬一浩（岡田紅陽写真美術館学芸員）「富士を愛した写真家～岡田紅陽」

http://www.plantatree.gr.jp/farm/message/okada_koyo.html

刊行物についてのお知らせ

■関東大震災に関連する東京都公文書館の刊行物

関東大震災と情報 東京都公文書館所蔵・関東大震災関係資料目録	(8 8 0 円)
都史資料集成第6巻 関東大震災と救護活動	(品切れ)
都史資料集成第7巻 震災復興期の東京1・2 (2分冊)	(7, 560円)

■防災に関する東京都の刊行物

東京都防災対応指針	(770円)
東京都震災対策事業計画 (平成20～22年度)	(1, 400円)
東京都震災復興マニュアル (プロセス編)	(370円)
東京都地域防災計画 風水害編 (19年修正)	(3, 080円)
東京都地域防災計画 震災編 (19年修正)	(3, 040円)
東京都地域防災計画大規模事故編	(1, 060円)
東京都地域防災計画火山編	(1, 060円)
津波浸水予測調査報告書 (伊豆諸島)	(4, 940円)
津波浸水予測調査報告書 (小笠原諸島)	(1, 520円)
あなたのまちの地域危険度	(260円)
地域危険図 (地震に関する地域危険度測定調査報告書第6回)	(550円)
地震に関する地域危険度測定調査報告書 (第6回)	(660円)

上記の刊行物は都民情報ルームで販売しています。購入・お問い合わせは下記まで
お願い致します。

都民情報ルーム

〒163-8001 新宿区西新宿二丁目8-1

東京都庁第一本庁舎3階北側

TEL 03-5388-2276